



沢登地区には居間に代々の切子を飾られているお宅もある。古い切子作品を紹介される名取勝さん（左から3番目が右の写真の作品）。



作者および正確な年代は不明だが、大正時代から昭和初期の頃の作とみられる。

沢登切子保存会

地区の若者が担い手であった切子を、後世へと伝承するため、昭和50年に区が発起人となって保存会が結成されました。

地元の小学校への切子の指導や、定期的な講習会の実施、さらには多くのイベントに参加して実演・体験・展示などを行い、後継者の育成と切子の継承に努められています。



豊小学校の「切子クラブ」。30年以上にわたり指導を行っている。

麻の葉模様



絵柄には、「地紋」として必ず「麻の葉模様」を用いることとなっています。麻の葉模様は六角形と三角形を組み合わせた複雑な幾何学模様で、中世から仏像の装飾に用いられてきた日本の伝統的な模様の一つです。邪気を払う力があるとも考えられました。また、麻の葉は成長が早くまっすぐ育つことから、こどもの成長を願い、産着の柄に使われるなど、江戸時代には縁起の良い模様として広く親しまれていきます。その他にも、六角模様（亀甲）、格子模様などの日本の伝統的な模様を組み合わせて絵柄が構成されます。

「切子」は、古くは六角堂の護符として祭典の折に沢登地区内の各戸に配られていました。現在でも祭典に奉納された切子は、先達による審査によって等級がつけられ、龍澤寺住職が祈禱し、祭典後に、観音様のお札や供物と共に区内全戸に配られ、神棚などに飾られ招福の護符としています。

切子の起源は定かではありませんが、寛文四（一六六四）年に六角堂を現在地に移転した際に切子が奉納され、時の代官を招いて盛大な祭典が行われたとする伝承が記録されています。この時点ですでに六角堂と切子の関係は発生していたと考えられます。

現在地区に残されている年代が判明している最古のものは、大正時代初期のもので、デザインや紙質などからさらにさかのぼるとみられるものも存在しています。

全国には、沢登地区と同様な伝統的な切紙細工が二十件ほど確認できますが、六角堂の切子は、その「精緻さ」で群を抜いています。「麻の葉模様」を用いることが原則となつてい

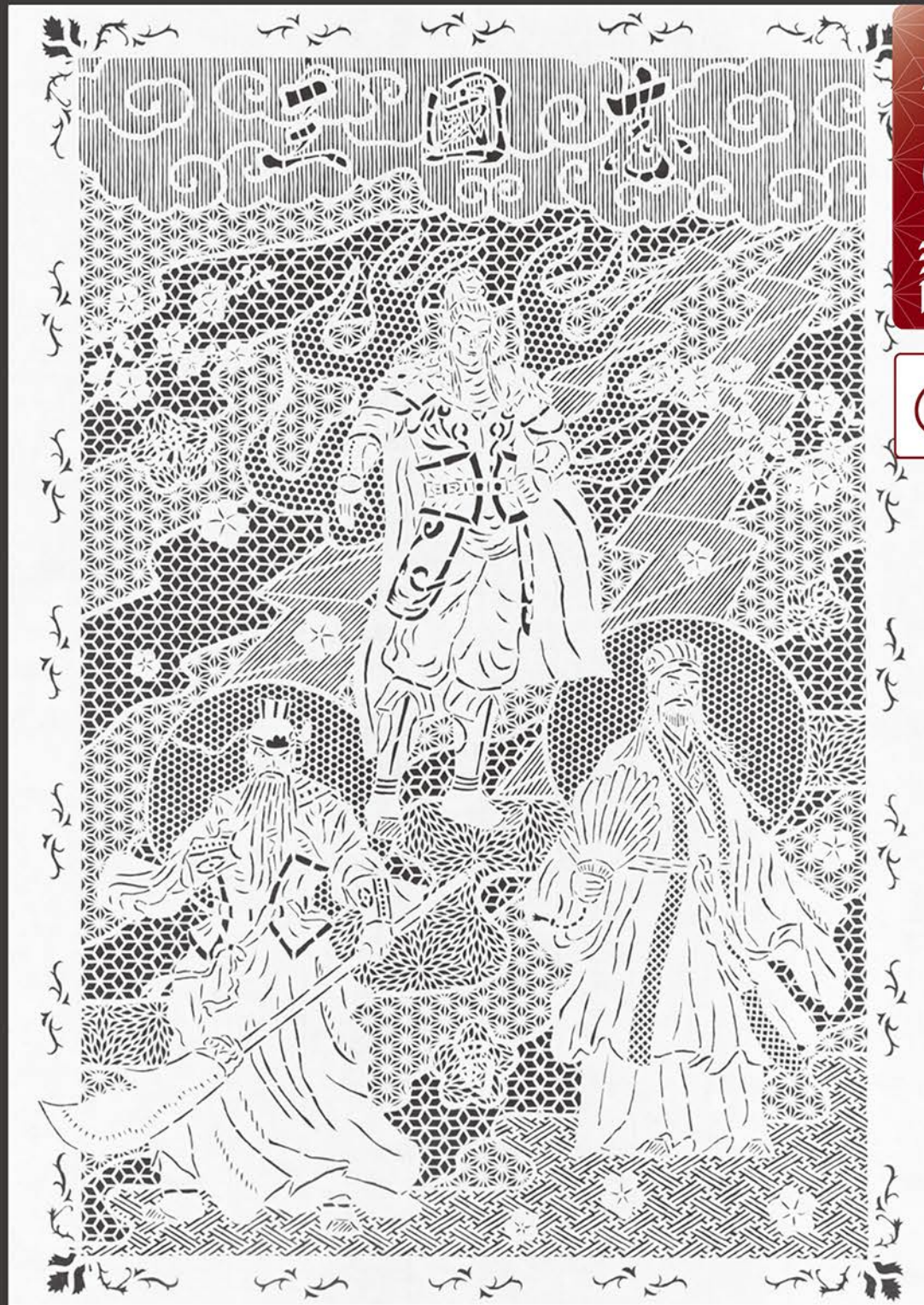
テレビ番組

日本の祭り2021

放送決定!

「心静かに、願いを込めて
～沢登六角堂の切子～」

- 令和3年11月14日(日)
- 午後4時～4時55分(予定)
- YBS 山梨放送にて



沢登六角堂の切子(山梨県指定無形民俗文化財・平成8年指定)

令和3年度知事賞 作/名取幸一氏

沢登地区に古くから伝承されている「切子」。別名「おすかし」とも呼ばれ、薄手の美濃和紙を10枚から15枚程重ねて、「切り出し」や「つきのみ」と言う手作りの刃物を使って図柄や模様などを「切り透かし」ていく切紙細工です。六角堂の祭典までに、地元の沢登切子保存会を中心として地区住民などが製作し、毎年10月13日の六角堂の祭典に奉納・展示されます。今年も71点の作品が奉納されました。



ふるさと
の172
誇り

博しポート

沢登の六角堂と切子②